

K-POP における “女性らしさ” の再定義

——i-dle の SOYEON から見る自己表現と社会的影

響

本論文では、K-POP における女性アイドルの表現がどのように再定義されてきたのかについて、ガールズグループ「i-dle」のリーダーである SOYEON（以下ソヨン）の表現を中心に検討してきた。従来の女性 K-POP アイドルは、「可愛らしさ」や「受動性」といった男性の視線を前提とした表現が主流であったが、近年では主体性や自己肯定を前面に出した表現が増加してきている。本研究では、こうした変化が単なるコンセプトの流行ではなく、ジェンダー規範への批判や聞き手の価値観がどのように変化するのかを通し、社会にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。

分析にあたり、ソヨンが作詞・作曲・プロデュースを手掛けた楽曲のうち、“TOMBOY” “Nxde” “퀸카 (Queencard)” “Super Lady” の4曲を対象とし、歌詞及び MV (Music Video) の内容分析を行った。加えて、10～20代を対象としたアンケート調査を実施し、楽曲が受け手にどのように受容されているのかを検討した。分析の結果、“TOMBOY” では性別による役割期待そのものへの拒否が示され、“Nxde” では女性の身体を性的に消費する視線への批判と自己決定の重要性が強調されていた。“퀸카 (Queencard)” では美の基準が外見にあるという考えが相対化され、自信や自己肯定こそが価値であるというメッセージが提示されていることがわかった。また“Super Lady” においては、個人の自己肯定から集団としての女性の主体へと表現が拡張されていることが確認できた。これらの楽曲に共通して女性らしさは固定された属性ではなく、自ら定義し選択するものとして描かれていることが明らかとなった。

アンケート調査からは、ソヨンの楽曲が「強い」「媚びずに自分らしくて良い」といった肯定的な評価を受けており、特に女性の受け手にとって自己肯定や価値観の再考に繋がっていることが判明した。一方で、こうした表現が全ての層に同様に受け入れられているわけではなく、楽曲のメッセージ性の受け取り方には個人差があることも明らかとなった。

以上より、ソヨンの表現は K-POP における「女性らしさ」を、外見や他者評価に依存しない主体的な概念へと再定義しているといえる。本研究は、ソヨンの表現が K-POP というグローバルな大衆文化を通して、若年層のジェンダー観や自己認識に影響を与える表現の意義を示した。